学校行事において重要な参加の在り方とは何か

— 中学・高校の活動に対する大学生の意味づけを通した検討 —

○河本愛子¹

(¹ 東京大学大学院教育学研究科)

キーワード: 学校行事, 青年期, 意味づけ

What Is the Most Important Dimension of Involvement in School Events?:

From the Perspective of University Students Looking Back on Their Experiences in Middle and High School

Aiko KOMOTO¹

(¹ Graduate School of Education, The University of Tokyo)

Key Words: School Events, Adolescence, Meaning making

目 的

学校行事は、その歴史上、教育実践者に教育的意義が認められ、100年以上にわたり、実践が積み重ねられてきた(e.g. 山本, 1999)。現在では、必修の活動として、ごく日常的に学校生活で実践が行われている。しかし意外にも、学校行事への取り組みが現実的に機能しているのかは、実証的にはほとんど問われていない(山田, 1999)。学校行事は社会情緒性育成に有効であると前提視されて、必修の教育活動とされてきたものの、その実際の機能は明らかになっていないのである。

学校行事に取り組むことは個人の社会情緒性育成に実際に寄与しているのだろうか。寄与していたとして、どのような取り組み方が社会情緒性育成につながるのだろうか。本研究では、長期にわたっても学校行事の機能がみられるか、その際、重要な参加の仕方とは何かを検討するため、学校行事の当事者であった大学生が、どのように中学・高校の学校行事経験を意味づけるかを検討することとする。

方 法

研究対象: 関東、中部、中国地方 5 校における大学生 670 名
質問紙構成: 文化的行事か体育的行事いずれかを選択してもらい、検討を行った。

当時の参加度 Bohnert, Fredricks, & Randall(2010)の提唱した参加側面にもとづき、項目を設定した。選択した学校行事に対する参加期間、参加度合い(回数・時間)、傾倒を区別して検討を行った。

学校行事の意味づけ 河本(2013)を基に、58 質問項目からなる尺度を作成した。回答方法は 5 件法を採用した。

個人特性 数年前の出来事を想起する際には、想起する経験内容が個人のパーソナリティによって偏る可能性が考えられる。よって、本研究では、想起バイアスを生じさせる個人特性を統制するため、BIG FIVEを採用し、性格特性を統制することとした。和田(1996)の性格特性用語による尺度の 60 項目を使用することとした。回答方法は 7 件法を採用した。

結 果

1. 各尺度の因子構造

新たに作成した尺度である参加側面の一つである「活動に対する傾倒尺度」および、「学校行事の意味づけ尺度」の因子構造を探索的に特定するため、最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、「活動に対する傾倒尺度」では、1 因子解が得られた ($\alpha = .95$, 因子寄与 8.60, 因子寄与率 57.32%)。

「学校行事の意味づけ尺度」では Promax 回転による因子分析を行った結果、因子の解釈可能性から 6 因子が得られた。それぞれ「集団への肯定的感情 ($\alpha = .93$)」、「他者意識の高まり ($\alpha = .85$)」、「集団活動に対する消耗感 ($\alpha = .82$)」、「問題解決への積極性 ($\alpha = .89$)」、「他者統率の熟達 ($\alpha = .89$)」、「学校活動への更なる傾倒 ($\alpha = .73$)」と命名した。

2. 参加の在り方による意味づけの差異

どのような参加側面が、学校行事の意味づけに関連するのかを検討するため、「期間」、「回数」、「時間」および「傾倒」を独立変数、「学校行事の意味づけ(下位尺度)」を従属変数として、Amos 19.0 を用いた多変量回帰分析を行った。性格特性を統制するため、独立変数と BIG FIVE の下位尺度それぞれに共分散を仮定し、学校行事の意味に対してパスをひいた飽和モデルで分析を行った。

モデルを概観すると、学校行事に対する「傾倒」から従属変数にひかれたパスはすべて有意であったが、学校行事の「期間」、「回数」、「時間」から従属変数にひかれたパスはすべて有意でなかった(Table 1)。

考 察

以上の結果から、中学・高校の学校行事に対して参加することは確かに大学生の意味づけに寄与することが明らかとなった。ただし、長期にわたる社会情緒性育成を見据えた場合には、生徒に長時間、学校行事に関与させようとするよりも、生徒が活動に没頭できるよう働きかけることが重要で、今後はどのような活動内容であれば活動に没頭できるのか、生徒が活動に没頭できるよう、どのような教師の支援法がありうるのかを検討することが重要であると示唆された。

引用文献

- Bohnert, A., Fredricks, J., & Randall, E. (2010). Capturing unique dimensions of youth organized activity involvement: Theoretical and methodological considerations. *Review of Educational Research*, 80, 576–610.
- 河本愛子(2013) 学校行事に対する大学生の意味づけの検討 — 青年期前期・中期の経験に着目して — 日本発達心理学会第 24 回大会論文集, 188
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61–67
- 山本 信良 (1999). 学校行事の成立と展開に関する研究 紫峰社

Table 1 学校行事の意味づけに対する参加側面の多変量回帰分析結果(標準化偏回帰係数)

参加側面	集団への肯定的感情	他者意識の高まり	集団活動に対する消耗感	問題解決への積極性	他者統率の熟達	学校活動への更なる傾倒
期間	.03	.03	-.04	.02	.04	.03
回数	.00	.08	-.01	.02	.05	.04
時間	.03	-.01	.10	.03	-.01	-.06
傾倒	.58 ***	.27 ***	-.25 ***	.41 ***	.38 ***	.41 ***
R^2	.49 ***	.21 ***	.24 ***	.37 ***	.38 ***	.25 ***

*** $p < .001$